

2022年4月1日

# アジア研究図書館

『アジア研究図書館所蔵ユネスコ・アジア文化センター識字教育資料目録Ⅰ』（アジア研究図書館 叢書Ⅰ）刊行報告（河原 弥生）	1
令和三年度オンキャンパスジョブ事業の実施	3
ACCU識字教育資料ラオス語蔵書整理に携わって（大村 優介）	
ボードゲームを通して女性の教育の促進（Lee Kah Hui）	
フィリピン語の蔵書整理を終えて（米野 謙）	
ACCU識字教育資料を通して見る文化（松原 えみ）	
東京大学アジア研究図書館における「東南アジア三文庫」の整理（澁谷由紀・宇戸優美子）	10
令和三年度導入データベース紹介	17
アジア研究図書館利用案内	
次号の予定	
編集後記	

編集・発行：東京大学附属図書館アジア研究図書館研究開発部門  
(RASARL)

〒113-0033

東京都文京区本郷7-3-1

東京大学附属図書館 アジア研究図書館担当

asialib@lib.u-tokyo.ac.jp

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia>

# 『アジア研究図書館所蔵ユネスコ・アジア文化センター識字教育資料目録 1』 (アジア研究図書館叢書1) 刊行報告

河原 弥生

(かわはら やよい 東京大学附属図書館アジア研究図書館研究開発部門 准教授)

アジア研究図書館研究開発部門 (RASARL) は、2021年4月に発足し、アジア研究図書館の運営を担い始めた。その際、2014年度よりアジア研究図書館の構築支援を担ってきたアジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL) から引き継いだ図書業務の一つに、寄贈文庫の受入、整理がある<sup>1</sup>。

寄贈文庫の受入は、当館の質の高い蔵書構築のための課題の一つであるが、アジア諸言語の資料を整理する際には、目録についての知識に加え、アジア諸言語の能力やアジア諸地域の文化や社会についての理解が求められ、時間も人的コストも要する<sup>2</sup>。

RASARLでは現在六文庫を整理中であるが、2021年度は、その一つ、公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) から2014年に受贈した識字教育資料<sup>3</sup>の一部の整理を終え、公開に向けて目録を刊行した。



河原弥生・鈴木舞編『アジア研究図書館所蔵ユネスコ・アジア文化センター識字教育資料目録 1』アジア研究図書館叢書1、東京大学附属図書館アジア研究図書館研究開発部門、2022年 (非売品)

本コレクションは、ACCUが1980年代からアジア太平洋地域において展開してきた識字教育事業に関する資料群であり、文字を読み書きできない成人のための学校外 (ノンフォーマル) 教育の教材であることを特徴とする。25カ国で収集された約3,600点の資料から成り、教材の内容は、乳幼児の健康や栄養、農林水産業の知識、環境汚染、森林保全、母子保健、女性の識字教育の必要性など、日常生活の改善に直接役立つものとなっている。また、英語版モデルから各国語版が制作された共同開発教材の場合には、各地域の文化的相違が反映されており、教育、歴史、言語、地域文化、ジェンダー、保健衛生など、多様な研究分野に資する一次資料である。

一例を挙げると、アフガニスタンの資料の中に、『なぜ女性に読み書き能力が必要なのか』と題された冊子が含まれている。1992年というソ連軍撤退後の混乱期に女性のための識字教育を目的に出版されたものであるが、昨今の国際情勢を踏まえると、新たな角度から研究利用できる資料であろう。



『なぜ女性に読み書き能力が必要なのか』ユネスコ・アジア文化研究センター、1992年 (ダリー／ペルシア語)

本コレクションは、図書だけでなく、ポスター、双六、紙芝居など多様な形態の資料を多数含んでいる。そのため書誌情報をOPACに登録するのは難しいと判断し、資料の画像を掲載した目録を作成することにした。また、一般図書のように開架書架や自動書庫に置くことが難しいため、職員による出納方式で公開することとし、本目録に請求番号を示した。

第1巻である本巻は、アフガニスタン（37点）、中国（251点）、イラン（104点）、モンゴル（124点）、ウズベキスタン（3点）の5カ国分の資料計519点の書誌を収録する。目録は全3巻で構成され、本書に続き、東南アジアおよび太平洋地域の13カ国分を第2巻として、南アジアの7カ国分を第3巻として刊行予定である。本コレクションのすべてをできるだけ早く研究利用に供することができるよう努めたい。

ところで、個人的な思い出話で恐縮だが、私は東京外国語大学の学部生だった頃にACCUでアルバイトをしたことがある。大学の掲示板で求人情報を見つけ、国際機関に憧れていた私は「ユネスコ」の名称に惹かれて迷わず応募した。1～2年の短期間だったが、野間国際絵本原画コンクールという別の事業のお手伝いをしていた。30年近く経って着任した図書館において、そのライブラリにあった資料を整理することになったのは、偶然とはいえやはり感慨深い。いくつかの表紙絵には見覚えがある気がする。

整理を担当することになり、10月に共編者の鈴木舞助教（当時。現山口大学人文学部講師）とともにACCUを訪問して、寄贈後8年を経てようやく一部を公開できることをご報告し、改めてACCUの諸事業についてお話を伺い、現在ライブラリに所蔵される資料を閲覧させていただいた。多忙な業務のなかご対応くださったACCUの方々にこの場を借りて感謝申し上げたい。

また、本巻所収の国々の資料整理には、

本学の全学事業として採択された「オンキャンパスジョブ活用による新図書館の効果的運用」の予算により、主にカウンター業務のために雇用されている博士課程の学生と、U-PARLで特任専門職員として雇用されている博士課程の学生が、専門知識をいかして業務に参画した。3,600点の資料の箱出しや既存リストとの照合から始め、目録の校正まで一通りの作業をお手伝いいただいた。

同時に今年度以降に刊行予定の巻の整理も併行して進めた。博士課程学生支援オンキャンパスジョブ（2021年度）の制度を利用し、博士課程および修士課程在籍学生を雇用した。制度のスケジュールの都合上、半年足らずの短期間ではあったが、7名の大学院生に、9カ国14言語の資料の整理を担っていただいた。

いずれの学生も、専門分野や図書業務経験の有無は様々であったが、皆、自ら疑問点を見つけては解決、報告してくれた。とても頼もしく感じるとともに、アジア研究に関する様々な事情を教えてもらうことも多く、楽しく協働させてもらった。この機会が、彼らにとって、資料や分野、人との出会いの場となったならば幸いである。

本書の刊行を機に、本コレクションが多くの方々に用いられることを願っている。

## 注

1. ただし、寄贈文庫のうち、辛島昇、奈良毅、桜井由躬雄、古田元夫、末廣昭各氏の文庫については2021年度初頭の時点でU-PARLにおいて整理途中であったため、引き続きU-PARLが整理作業を担うことになった。
2. この点については、本号の澁谷・宇戸報告も参照されたい。
3. 2014～2015年度における受入と予備整理に関してはU-PARLのウェブサイトを参照されたい。

<http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/accu>（2022年3月30日アクセス）

## 令和三年度オンキャンパスジョブ事業の実施

ここでいうオンキャンパスジョブとは、東京大学の学生支援事業を指す。未開拓事業を含む大学の活動全般にわたる業務について、学生が東京大学での研究や学修活動を通じて得た高度な知識、技能、技術を活かした新たなジョブとして創出し、大学業務に参画することにより、自らの研究内容などをキャンパス内で実装する経験を積むと同時に、学生の経済的支援に繋げることを目的としたものである。

アジア研究図書館が収集・整理・分類を行なう資料の中には、アジアの諸言語で記述されているものが大量に含まれる。これらの適切な処理には、各言語はもちろん、その言語を用いる地域を対象とした研究分野の知識が要求される。一方で、所属スタッフが扱いうる言語と研究分野にはおのずと限界があり、さらにコロナ禍による蔵書整理の遅滞が懸案となっていた。

そこでアジア研究図書館は、学内他部局からの移管資料や寄贈文庫のうち、アジアの諸言語の資料の整理を進めることを中心的なジョブとする、博士課程学生支援オンキャンパスジョブ(2021年度)を実施した。図書館としては、アジア研究を専攻する学生の知識を活用することで円滑に蔵書の整理を進めることが可能となり、学生にとっては、言語能力の向上や専門図書についての知識の増加など、研究能力の向上にも繋がることが期待されるがゆえである。

今回は、ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)から寄贈された識字教育資料の整理に携わっていただいた(\*ACCU識字

教育資料については上の河原稿を参照されたい)。今回扱い得た地域は、フィリピン、マレーシア、ベトナム、ラオス、インドネシア、バングラデシュ、インド、ネパール、パプアニューギニアである。ここで整理・分類されたデータは、アジア研究図書館叢書の第二巻・第三巻として出版する、ACCU寄贈資料目録の中に組み込まれる。今回参加され、適切な方法で資料を整理すべく奮闘された学生の方々に、改めて謝意を表明したい。

以下に掲載する文章は、今回の事業に初期から参加した学生の方々からご寄稿いただいたものである。これにより、当館が行なったオンキャンパスジョブの一端をうかがうことができるだろう。



オンキャンパスジョブ作業風景



## ACCU識字教育資料ラオス語蔵書整理に携わって

総合文化研究科博士課程 大村 優介

筆者は2019年～2021年にかけて、ラオス人民民主共和国の首都ビエンチャンでフィールド調査を行った経験がある。その際に習得したラオス語を活かし、本年度のオンキャンパスジョブの一環として、ラオス語資料の整理作業に携わる機会をいただいた。本稿では作業中に気づいた資料の特徴や、筆者が特に関心を惹かれた資料をいくつか紹介したい。

今回扱った資料の多くはノンフォーマル教育、つまり学校のカリキュラムの枠外での教育活動で使われる教材である。種類はポスター、紙芝居、CD、リーフレット、絵本、教科書など様々であり、中には文章、挿絵ともに手書きの資料もあり、教育現場の生の雰囲気を感じさせる。また、書誌情報が完全ではない資料が多く、著者名や出版者情報が未記載または不明瞭な資料がしばしば見られた。

写真1はラオス北部のファパン県向けの教科書である（『ファパン向けノンフォーマル基礎教育教科書レベルⅠ』、著者名不明、1998年、教育省ノンフォーマル教育発展センター）。内容は機織り、養豚、薪の切り方に加え、計算問題や、売買契約書や行政の許可証の書き方など多岐に渡る。村での生業に関する技術的知識を広めるとともに、様々な理由で学校教育を受けられなかった人々が商品経済や行政手続きとの関わりの中で困らないような知識が盛り込まれていることが分かる。特に機織りはファパン県の産業として有名であり、地域に合わせた内容を盛り込もうとする工夫が窺える。

写真2は、ラオスの子どもに絵本を送る会（現：NPO法人ラオスの子ども）出版の、ラオスの民話に基づいた絵本である（『孤児とジャコウネコ：民話』、ダーリワン・シットパサイ著、ドゥアンドゥアン・ブンニャーウオン編、2001年、ラオスの子どもに絵本を送る会）。同会は1982年に設立された日本の団体であり、ラオスでの児童書の出版、学校図書室や文化センターの運営支援などを行っている。この絵本を含め、ACCUから寄贈された様々な識字教育資料は、出版文化の規模が近隣国と比べて小さく読書習慣がさほど普及していないラオスにおいて、人々が本に触れる機会を増やす貴重な資源となっている。



写真1 『ファパン県向けノンフォーマル基礎教育教科書レベルⅠ』



写真2 『孤児とジャコウネコ：民話』

## ボードゲームを通して女性の教育の促進

人文社会系研究科博士課程 Lee Kah Hui

インドネシアの識字率は2020年に96%を達成したが（World Bank 2021）、第二次世界大戦後1945年にインドネシアがオランダから独立を公表した時、人口の5%しか読み書きできなかった（Lowenberg 2000）。当時膨大な教育費によって学校に通えない・継続できない状況に対して、国家教育省は国際機構の協力とともに1951年からノン・フォーマル教育プログラムを実施してきた。例えば、1966年から1979年の間にUNESCOが紹介した、新たな手法の「Traditional Literary（その後、「Functional Literacy Program」と称される）」の導入である（Jalal and Sardjunani 2005）。この手法は、読み書きのほか実務技能も教えることによって、識字の向上とともに受講対象の職業能力を高めた。ACCUが収集した資料においては、鶏の育ち方に関するガイドブックをはじめ、瓦の生産、環境、起業など幅広い分野を扱っている。

それに加え、非政府組織によるノン・フォーマル教育活動も増加してきた。女性による小・零細企業の促進を目標とするYayasan Persepsiは、女性向けにマーケティング戦略などのトレーニング、零細企業、避妊、経済などをテーマにしたディスカッション、ローンの提供などの活動を行ってきた。学習及びコミュニティ・エンパワーメントセンター（SPPM）と出版社のStudio Driya Mediaとともに、農村地域に住む15歳以上の女性向けにディスカッションを促進するためのボードゲーム「Angka Bermakna（有意義な数字）」を作成した。このボードゲームは12小区域および21支援対象の村で、村ごとに1〜3グループ、各グループ15〜25人、少なくとも小学校二年生まで学校に通った女性を対象にした。

Angka Bermaknaの各回は1人のファシリテーターと最大5人のプレイヤーで、ビジネス、女性の健康、グループ管理、ジェンダー、政治および機能的リテラシーという六つのテーマから一つのテーマを中心にゲームが行われる。5人を超える場合、余った人数は観客として参加してゲーム中にプレイヤーの意見にコメントすることができる。ゲームの進め方は、プレイヤーは順番にサイコロを振って、該当の数字にボードに種（＊植物の種子の形を模したコマ）を移動して、同じ番号のカードを読んだ上で意見を出しながらその他書かれた指示にも従うというものである。例えば、政治のテーマで4を出した場合、「庶民にとって選挙のメリットは？ どうしてそうなのかについて意見を述べなさい」のような指示になる。各カードは最大5分間のディスカッション時間があり、時間が許す範囲で他のプレイヤーと観客もさらに意見を出すことができる。カードはすべてで20枚あり、全部が使い切った時点、もしくは一時間が経った場合にゲームは終了となる。



ボードゲーム「Angka Bermakna」

Angka Bermaknaのゲームプレイから見られるのは気楽な設定で意見・情報を交換しながらの学習環境である。サイコロを振って種を動かすことで算数をする練習になり、カードを読んで理解することは文章の読解練習となる。ルールブックにも字が読

めない人はほかのプレイヤーに読んでもらうことが可能だと書かれ、助け合う精神とインクルーシブな環境作りが見られる。さらにカードによって褒賞をもらえることがあって、仕事を優先することよりこのような教育機会に参加する奨励になると考えられる。しかしAngka Bermaknaに限らず、実際ノン・フォーマル教育プログラムが識字率に与えた影響は大規模な評価を行われなかったため、具体的なインパクトは未だに不明なままである。幸いに残ってきた資料のおかげで、Angka Bermaknaを見てきたように当時の状況に応じる教育促進のために誰に対してどのような活動が行われたか、事業のフォーカスはどのようなことだったかが検証できる。



「Angka Bermakna」の6テーマ



テーマ「政治」の表・裏面

#### 参考文献

Jalal, Fasli and Nina Sardjunani. 2005. "Increasing literacy in Indonesia." Paper commissioned for the *Education for All Global Monitoring Report 2006, Literacy for Life*. Paris: UNESCO.

Lowenberg, Peter. "Writing and Literacy in Indonesia." *Studies in the Linguistic Sciences* 30, no. 1 (2000): 135-148.

## フィリピン語の蔵書整理を終えて

総合文化研究科修士課程 米野 謙

昨年の夏休みに自分が所属する駒場の総合文化研究科の院生ホームページの「お知らせ」欄を見ていたら、ある求人が目に留まった。本郷の総合図書館のアジア研究図書館が「アジア研究図書館におけるアジアの特殊言語の蔵書整理（識字教育資料）」に携わる院生スタッフを募集していた。実施要領をクリックすると、ベンガル語、ウルドゥー語、ゾンカ語、モンゴル語、ラオス語などのアジア諸地域の言語がリストアップされていた。合計で12の言語があったが、その一つにフィリピン語も入っていた。これらのアジア言語は、日本で学習者が多いフランス語やスペイン語と比べたら確かに「特殊」かもしれないが、学部時代に言語学を専攻し、「全ての言語はみな（言語学上）同等である」という考え方が徹底して仕込まれた身としては、ある意味、新鮮だった。正直、自分の持っている言語知識が日本において「特殊」だと考えるのも悪くなかったが。フィリピン語の読み書きができることが条件の求人はレアで、「なかなか面白いことが起こりそう」と思い、応募してみた。

さて、駒場でイギリス研究（主にイギリス社会言語学）をしている私がフィリピンとどのような関係を持っているのか気になった方もいることだろう。私はフィリピンの首都マニラで生まれ育ち、14年間現地に滞在した。自然なことかもしれないが、私にとってフィリピン語（タガログ語）は母語に近い存在である（そもそも言語学の中でも社会言語学に興味を持った理由は、一般的な「母語」という概念に抵抗があったからだ）。よく周りにその経緯を聞かれるのだが、それに対して大体「父親はフィリピン人で、日本人の母親はフィリピンの民



族音楽を研究している人」と答えると、みな口を揃って「へえー」と興味津々に反応してくれる。こっちとしては自分で選んで決めたことではないため、あまりinterestingなものと考えたことはなかったが。

そして、アジア研究図書館の院生スタッフとしての採用面接の際、面接官の河原弥生先生から、タガログ語以外のフィリピン言語の知識はあるかと聞かれた。「自分の出番だ」と思った瞬間である。私は母の仕事の関係で、4歳から6歳の間にフィリピンのルソン島北部の山岳地帯（バギオ市、マウンテン・プロビンス州、カリンガ州など）に滞在したことがあり、それぞれの現地語の知識もあった。バギオではイロカノ語 (Ilocano/Ilokano)、マウンテン・プロビンス州ではカンカナウイ語 (Kankana-ey)、カリンガ州ではヴァナウ語 (Vanaw) を話していたのを今でも鮮明に覚えている。残念ながら、今はどの言語もすらすらとは話せないが、読解と聴解はできる。このような細かい話は面接の時は省いたが、イロカノ語の資料もあることを知り、イロカノ語の知識を最大限に生かしたいとお話した。

今回、識字教育資料の蔵書整理を行う中で、1970年代から2000年初期に出版・作成された資料を目にして、題目を読んだだけでフィリピンがいかにかに20世紀後半から女性の教育、リーダーシップ、人権などに力を入れてきたのかが改めてわかってくる。作業中に資料の内容を流し読みすると、カトリック圏のマニラで育った私が初めて見るようなイスラーム教徒の家族の絵などが描いてある資料もいくつかあった（フィリピンはおおよそ8割の人がカトリック教徒であると言われており、フィリピン全体のイスラーム教徒の9割が南のミンダナオ島に住んでいる）。その他にも、歴史、農作、健康、ドレスメーキング、レストラン経営

関連のさまざまな資料があり、楽しく作業を進めることができた。タガログ語の資料はもちろん、英語のもの、英語とタガログ語半々のもの、イロカノ語やセブアノ語、マギンダナオ語の資料もあり、フィリピンがいかにかに多言語社会であるのかに改めて気付かされた。ちなみに、私の生まれたマニラ首都圏 (National Capital Region) は英語とタガログ語のダイグロシア (diglossia, 二言語変種使い分け) 社会である。

オンキャンパスジョブ (OCJ) を通して自分の出生国に関わる資料を整理することができ、非常に趣深い経験をさせていただいた。また、他の言語はスタッフが一人で作業をしている中、幸いにもフィリピン語担当には教育学研究科修士課程の上戸大雅さんもいらっしゃった。上戸さんは、学部時代にフィリピン語を専攻され、マニラ留学を経て、大学院では私の出身校であるマニラ日本人学校 (MJS) を研究対象とされている。初めてお会いした時はこの偶然に驚いたが、本当に東大にはいろんな人がいるものだと感じた。もしもあの時応募していなかったら、このようにまた少し変わった角度からフィリピンを見つめ直すことはできなかっただろうし、同じ大学でフィリピンを研究対象とする同輩にも会うことはなかったかもしれない。この機会を与えてくださったアジア研究図書館のみなさまに感謝申し上げます。Maraming salamat po!



英語とフィリピン語の資料



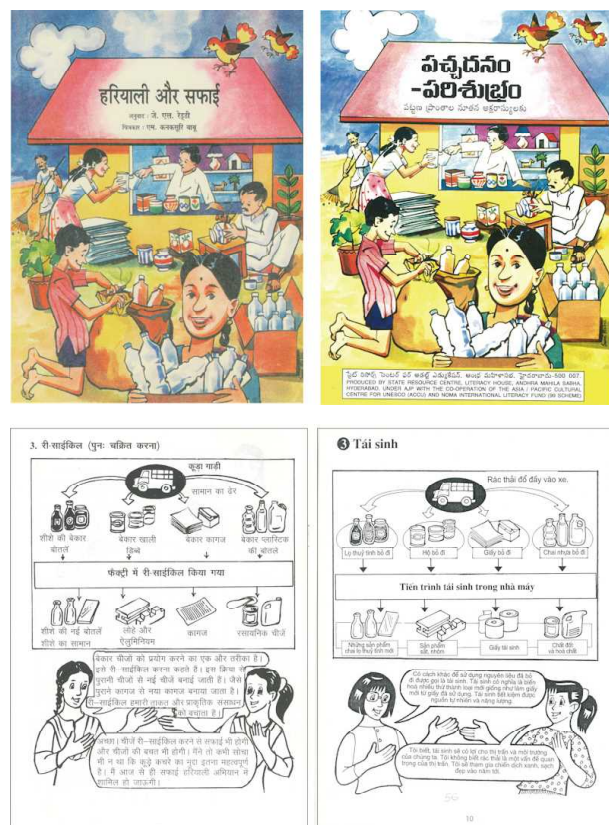
## ACCU識字教育資料を通して見る文化

人文社会系研究科修士課程 松原えみ

今回、私が整理を担当したユネスコ・アジア文化センター（ACCU）の資料はヒンディー語とベトナム語であり、それらの作業を通して気がついた点を数点述べさせていただきます。

まず、私はヒンディー語のリスト作成作業から取り掛かった。インドで使用された識字資料として一纏めにされていた資料の中にはインドで使用される様々な言語の資料があったため、まずは言語別に資料を仕分けるところから始まった。仕分けしている中で、挿絵は同じ、言語が異なるという資料があるのを発見した。ACCUによってインドで使用される複数の言語のバージョンが作成されているためである。私にはインド出身の友人がいるのだが、その友人はカンナダ語が主に使用される南インドのカルナータカ州出身で、大学に入学して初めてヒンディー語を学習したそうである。このようにインドでは、その地域において使用されるヒンディー語以外の言語も社会的に重要な位置を占め、ヒンディー語を使用しないで生活するという人は一定数いるし、インド出身の友人たちの話を聞いていると、言語の多様性が重視される社会であるように感じる。そのような社会事情に対応して、インドでは識字教育や生活上に必要な知識の普及を目的とした今回のACCU資料において、その地域で使われる言語の教材を作成することが、その地域に知識が効果的に浸透していく上で、大きく貢献しているのだろうと感じた。この地域文化に密着した識字教育資料の作成は、インド内にとどまらない。現在はベトナム語の資料の整理に移っているが、時折見覚えのある挿絵のある本に出会うことがある。ACCUはメインのプロットや挿絵を各国・地域の

文化を反映して変更しているため、インド版ではサリーなどを着ていた女性がベトナム版では洋服を着ていたりするし、リサイクルの説明をする本でベトナム版では古紙がトイレットペーパーとしてリサイクルされる絵が描かれているが、インドではトイレットペーパーが一般的ではないため、普通の再生紙の絵に差し替えられていたりして、現地の人々にとって、より馴染みやすいものとなっている。



左：ヒンディー語；右：ベトナム語

このACCUの翻訳・翻案はまさか結びつくとは思っていなかった、地域・時代が全く異なる私自身の研究にも関連していた。私は現在、日本の近代の衛生思想を研究テーマとしているが、日本近代の衛生概念普及に大きな役割を果たした長與専斎という内務省官僚がいる。彼は、当時日本にはなかった公衆衛生という概念を西洋から日本へ移入するにあたって、旧来の慣習を公衆衛生という概念の普及を困難にする問題の一

つと考えていた。そして、それを克服するための方法として、医学の専門家が原理を考え、経済上の問題を考慮し、その時その土地に適当な方法や順序を丁寧に説明することを挙げている<sup>(1)</sup>。時と場所は違うが、今回のACCUのその土地の習慣に根ざした翻訳・翻案という取り組みは、長與の考えと通底するものがあるように感じた。

このように、ACCUの識字教育資料には全く関係ないと思っているところで発見があるように思える。また、識字資料のため、多くの挿絵が入っており、その地域の文化に触れることができたり、二つの言語の資料を見比べて違いを見つけたりと、作業しながらその土地の文化に触れたような気分だった。その意味で今回の作業を通して、大変貴重な経験をさせていただくことができた。

#### 注

(1) 長與専斎「衛生普及ノ障碍ハ果シテ何物ゾ」  
『大日本私立衛生会雑誌』第54号、p. 27-36、1887年。

# 東京大学アジア研究図書館における「東南アジア三文庫」の整理

澁谷 由紀

(しぶや ゆき 東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL) 特任研究員)

宇戸 優美子

(うど ゆみこ 東京大学附属図書館アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL) 特任専門職員)

## はじめに

本報告は東京大学アジア研究図書館における東南アジア関係文庫、具体的には桜井由躬雄文庫、古田元夫文庫、末廣昭文庫の三つの文庫について、2014年4月から2022年3月現在まで行われてきた整理について報告するものである。本報告では以下これらの文庫を総称して「東南アジア三文庫」と呼び、また整理とは受入・分類付与・目録データの作成と登録という三つの作業を含むものとする。

「東南アジア三文庫」の整理の特徴は、図書館職員のみならず、アジア研究者が積極的に参加したという点にある。まず、個々の研究者が集めたコレクションの受入の問題はアジア研究図書館の設立が計画された段階で議論されていた(古田 2014: 1)。そして、アジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門 (U-PARL) はその第一期 (2014～2018年度) において、アジア研究図書館の構築支援を主要なミッションとして掲げ、(1)「寄贈資料の整理・研究と受け入れ」、(2)「(いわゆる) 多言語資料の整理・登録」と「多言語資料の登録の合理的仕組み作り」を業務の一部としていた<sup>1</sup>。さらに、同文庫は本学に在職した教員の旧蔵資料であり、その中核は多言語資料であった。受入資料の選定や目録データ作成にアジア研究者が参加することが当然視された背景にはこのような事情がある。

しかしながら図書館の管理・運営に関す

る具体的な知識や見識を持っていたのは図書館職員であり、とりわけ、資料の登録および資産管理、装備・製本・修理に関する業務はほぼすべて図書館職員の職掌に含まれていた。受入資料の選定や目録データ作成についても図書館職員の知見が必要不可欠であった。そのため、同文庫の整理に際しては、アジア研究者と図書館職員との間の連携・調整が大変重要になった。

このような状況の中行われた「東南アジア三文庫」の整理は試行錯誤の連続であった。加えて総合図書館本館改修工事が同時期に行われたこともあり、同文庫の整理には長い時間を要した。2022年3月16日時点で古田元夫文庫の登録は雑誌とマイクロ資料を除きほぼ完了しているが、桜井由躬雄文庫と末廣昭文庫の登録は図書・雑誌ともに未完である。したがって「東南アジア三文庫」の整理は、他の図書館・室の模範的・理想的事例とは位置付けられない。しかしながら、同文庫の整理を機に、寄贈資料の整理や多言語資料の整理に伴い発生する諸問題について明らかになった点も多く、同文庫の整理について記録として残す必要性は高いと思われる。

## 1. 東南アジア三文庫の概要

### (1) 主なコレクション受入の経路

現在、アジア研究図書館の所蔵資料は、主として (1) 学内他部局からの移管資料、および総合図書館の他フロア・書庫からの



配置換え資料、(2) U-PARLのアジア関連資料購入費、大学から措置されたアジア研究図書館の開館準備および運営のための予算による購入資料、(3) 国際交換、寄贈の三つの経路から蓄積されている。受入経路に焦点を当てた場合、東南アジア関係コレクションの最大の特徴は、(3)のうち、「文庫」と呼ばれる大口寄贈由来の資料が多いという点にある。

## (2) 「東南アジア三文庫」

受入済みの文庫は、(i) 歴史地域学者の故・桜井由躬雄氏の旧蔵書約2,100点からなるコレクションで、ベトナム語で記述されたベトナム史やベトナムの文化・社会に関する図書が多く含まれる桜井由躬雄文庫、(ii) ベトナム現代史を専門とする古田元夫氏の旧蔵資料約300点からなるコレクションで、ベトナムの政治や社会に関する資料が多く含まれる古田元夫文庫、(iii) タイを主なフィールドとするアジア経済研究者、末廣昭氏の旧蔵書約2,200点からなるコレクションで、主にタイの経済、社会、政治史に関するタイ語文献と雑誌から構成されている末廣昭文庫の三つである【写真1】。

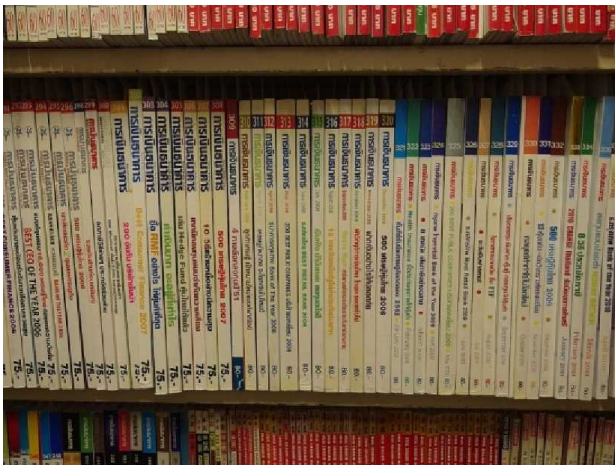


写真1: 末廣昭文庫のタイ語雑誌（現在未整理・未配架）。

「東南アジア三文庫」のコレクションの内容の詳細に関しては既にU-PARLウェブサイト上に解説記事等が掲載されている（澁谷 2020-2021; 澁谷 2021a; 澁谷2021b;

宇戸 2020-2021）。

## 2. 寄贈資料の整理-図書館職員と研究員による協働-

### (1) 受入の経緯と担当者

著者らは「東南アジア三文庫」の受入決定に関与していないため受入の経緯については把握していない。（末廣 2021: 6）によれば、アジア研究図書館のアイディアが具体化する以前に、東京大学社会科学研究所が提案した「アジア図書館」構想の中で、研究者が集めた膨大な量の書籍と資料、さらに研究者自身のフィールドノートなどの「研究資料」を重視しようという議論があったようである。

2014年には桜井由躬雄文庫と末廣昭文庫が、2015年には古田元夫文庫の整理が開始された。2018年3月まで整理を主に担当したのは、U-PARL特任研究員（以下、研究員）として雇用された宇戸優美子（タイ関係資料：2014年4月～2015年3月）、藤倉哲郎（ベトナム関係資料：2014年4月～2015年3月）、澁谷由紀（同左：2014年4月～2018年3月）、ワリントン・ターマリヤブット（2015年4月～2017年3月）であった。各研究員の従事時間は週あたり5～17時間程度であったが、各研究員は購入資料の選書など、寄贈資料整理以外の業務もあわせて担当した。また不定期にアルバイト大学院生に作業をお願いした。

さらに2018年4月以降現在までは、澁谷が東南アジア担当の常勤の研究員として「東南アジア三文庫」を、2021年4月以降現在までは宇戸が特任専門職員として末廣昭文庫を担当している。また2015年度以降現在まで、目録担当職員1名が業務時間の一部を整理作業にあてている。

なお、U-PARLは寄附研究部門であり、そのスタッフの雇用経費は上廣倫理財団の支援によって賄われてきた。

## (2) 場所の確保の問題

2014年に桜井由躬雄文庫と末廣昭文庫の整理が開始されると、いくつかの問題が明らかになった。

第一の問題は、学内に整理のための場所を確保できないことである。2015年9月にスタートすることになる総合図書館本館の改修工事を前に、総合図書館にまとまった場所を確保することは難しく、また既に総合図書館に所蔵されている資料の移動場所も必要であるために、総合図書館外にスペースを見つけることも困難であった。さらにU-PARLの事務室内に備え付けられていた書架もわずか数連であり、作業に供することは不可能だった。

第二の問題は、やはり改修工事のため(さらにいえばそもそもアジア研究図書館が開館前であることにより)、資料を整理後、即座に利用に供することができなかった。

## (3) 難易度の高い目録作成

これらの問題はU-PARL設置以前から予測できたことである。第一の問題に対して、当時U-PARLに関係していた教員は、担当の研究員がノートパソコンを抱えて寄贈者のもとに赴き、その場で選書し、東京大学OPAC登録のベースとなるべき書誌データ作成を行うという方法で解決可能であると考えていた。

しかし実際に図書館職員とアジア研究者(具体的にはU-PARLの特任の教員と研究員)が協働をはじめてみると、ことはそう単純でなく、「研究員自身が資料保管現場で書誌データ作成を行う」という案は2014年度末までにいったん廃案とされた。

廃案となった主な理由は下記のとおりである。東京大学OPACの背後にある図書館システムは、オンライン共同分担目録方式によりつくられる全国規模の総合目録データベースNACSIS-CATに接続している。NACSIS-CATに書誌データを登録するための決まりごとは多い。図書や論文の巻末に

記載するような参考文献リストが作れるからといって書誌データ作成ができるわけではない。担当研究員は図書館職員向けの目録システム講習会テキストを学習したり、学外の大学で司書資格取得に必要な科目を履修したりしてこれらの決まりごとを習得しようと試みたが、研究活動の片手間に学習する程度の覚悟では自力で書誌データ作成が可能になるには至らなかった。

また、各種マニュアル類やインターネット接続環境も必要であった。作業の際には『英米目録規則(第2版)』や「目録システムコーディングマニュアル」(オンライン版)を参照せねばならず、さらに外国語資料を扱うため収録語彙数の多い辞書も必要であった。

また、当初の計画では、NACSIS-CATの入力項目に沿ったエクセルシートに、書誌データ作成に必要な情報を蓄積し、資産登録(受入処理)と書誌データ作成に使用するはずであった。しかし、親書誌一子書誌関係などの書誌の階層構造の表現や著者名典拠レコードのリンクなど、エクセルシートに蓄積しにくい情報があることがわかった。また資産登録に際しては資料の物理単位ごとに一件のデータが必要であるため、書誌データ作成用と資産登録用のエクセルシートは兼用できなかった。

くわえて、資料を利用に供することができない段階で書誌データを作成することが果たして効率的なのかという疑問も生まれた。前述のようにNACSIS-CATはオンライン共同分担目録方式によりつくられているため、資料を利用に供することができるようになった段階でどこかの図書館が先に書誌データを作成していれば、労力をかけて新たにデータを作成する必要がなく、登録を遅らせるほどその可能性が高まるからである。

## (4) 図書館職員と研究員の分担へ

このような状況を踏まえ、2014年度末に、

U-PARLにはアジア研究者だけではなく図書業務を担当できる職員も配置するのが望ましいという結論に達し、2015年度に目録担当職員1名が着任することになった。

その結果、2015年度以降、U-PARLの特任の教員・研究員と目録担当職員、附属図書館情報管理課選書受入係（当時、以下、選書受入係）との間で試行錯誤が行われ、整理に関する分担と業務フローが整備された。当時のフローは下記の通りである。

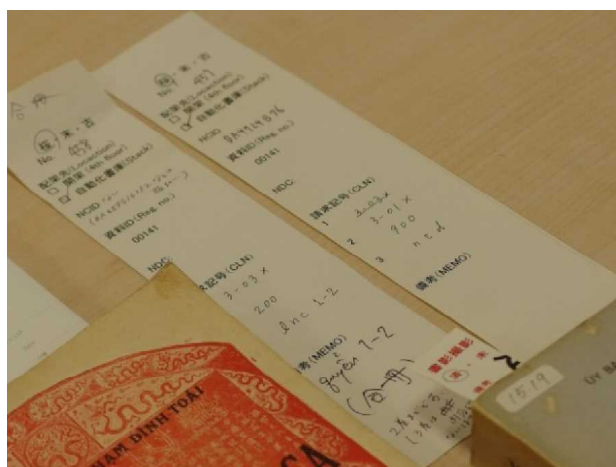


写真2: 整理用のしおり。文庫ごとに通番をつけて管理している。当初は他機関で使用されているものを参考に作成したが、U-PARLにとって使いやすいものに改変されていた。

研究員が寄贈者のもとで（1）資料の内容を確認しながら、（2）CiNii Booksを使って東京大学附属図書館や国内の大学図書館等の所蔵状況を調査し、（3）受入／受入謝絶の判断を行い、（4）受入の場合、国立情報学研究所書誌番号（NCID）をしおりに書入れ【写真2】、（5）受入予定資料をU-PARLのオフィスに送付・運搬する。資料到着後は、研究員が（6）CiNii Booksから資料現物から必要最低限の書誌データを資産登録用のエクセルシートに転記し、（7）タイ語等については翻字を記入する。とくに（6）と（7）については、書誌データ作成の諸規則に準拠するように、情報源の所在や書誌データの記述方法を目録担当

職員がチェックする。そのうえで、（8）選書受入係がエクセルシートをもとに資産登録を行い、（9）目録担当職員が資産登録の終了した資料を一時保管場所に移動させる。（10）分類付与と東京大学OPAC登録と装備はアジア研究図書館の分類表が定まりサービス提供が可能になった後に行う、というものである。要するに、当面のところ研究員は主に（1）～（7）を担当し、（10）は先延ばしにするということになった。

このような形で整理が進められた結果、受入については、2015年度に桜井由躬雄文庫、2016年度に末廣昭文庫と古田元夫文庫が完了し、東京大学OPAC登録については2017年度に古田元夫文庫、2019年度に桜井由躬雄文庫、2021年度に末廣昭文庫が開始された【図1】。

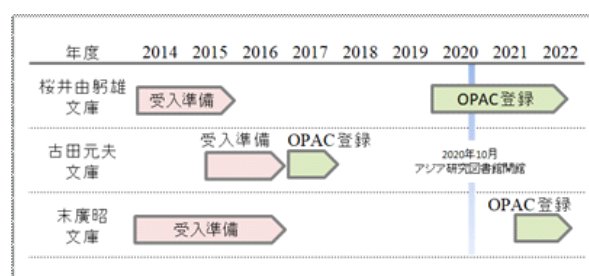


図1: 整理過程（2014年度～現在）。OPAC登録は図書のみを示している。雑誌やマイクロ資料の登録は現在未着手である。

分類付与作業については暫定のアジア研究図書館分類表をもとに2014年度から着手されていた。しかし分類表の確定が遅れたために、一部の資料については分類付与しなおしの必要が生まれた。また、資料の多くが一時保管場所に保管されていた時期が長く、最終的な分類付与作業は東京大学OPAC登録と同時進行で行われた。

### （5）アルバイトに可能な作業は何か

学部生・大学院生アルバイト等への作業依頼については読者の関心も高いと思われる。研究員が自力で書誌データを作成するという案は廃案になり、書誌データ作成にあたっては図書館職員と研究員が協力して



作成する体制がつくられたことはすでに述べた。そのために、研究員が目録規則の面で専門的な判断をする必要はなくなった。

とはいえ、書誌データ作成にあたっては、情報源の優先関係、版と刷りの違い、人名の記載方法、ALA-LC方式のローマ字翻字形<sup>2</sup>、重複書誌、親書誌－子書誌の階層関係など、目録の基礎的な知識は必要であった。「東南アジア三文庫」の整理に際しては、不定期に大学院生アルバイトの応援を頼み、基礎的な知識を習得してもらった。しかしながら、これらの内容は、学部生・大学院生アルバイトの誰もが短期間に習得できるものではない。学部生・大学院生アルバイトが担当しやすい作業は、先に述べたフローのうち、(1)～(4)までと思われた。

なお、分類付与については目録の知識は不要であるが、資料の内容を限られた時間の中で把握して主題分類を確定する必要があるため、高い言語能力と主題に関する豊富な知識を要する。多言語資料の場合、分類付与を担当できる学部生・大学院生アルバイトを探すのは容易ではないこともわかった。

さらに書誌データ作成の難易度は言語によっても異なった。「東南アジア三文庫」についていえば、ローマ字で表記されるベトナム語資料に比べて、タイ語資料の整理ははるかに難易度が高い。タイ語資料の場合、ALA-LC方式のローマ字翻字形と分かち書き、王族・貴族・高僧などの著者名の記述方法を習得する必要がある。また重複書誌データを作らないように、翻字形と原綴り(タイ文字)でそれぞれ検索するなど、検索の工夫が必要である。

このような点を踏まえれば、受入資料の性質に応じて、作業を担当する能力があり、かつアルバイトを長期間希望する学部生・大学院生を確保できるかどうかという点は、整理を検討する時点で考慮すべきであ

ろう。

## **(6) 受入謝絶資料の処理**

寄贈資料の整理に関して忘れてはならない問題に、収書方針に合致しない資料などの理由で受入謝絶した資料の処理がある。

「東南アジア三文庫」については、学内重複資料は原則的に受入謝絶とし、さらに多言語資料の中でもとりわけ利用者が限定されるものについて、日本国内に所蔵されている場合は受入謝絶とする方針を定めた。また受入は公開を前提としたものに限られたために、受入の可否判断が難しい資料については附属図書館情報管理課と協議しながらその可否を決定した。

これらの受入謝絶資料の一部には、寄贈者に返却する前に他館に受入を打診したものもあった。また、末廣昭氏収集資料のなかで、タイ語文献の一部、タイ人による経済史関係の修士論文のコピー、労働問題資料、華語で書かれたタイ華僑・華人文献、本人の多数のフィールドノート類は、本学ではなく、氏のかつての職場であった日本貿易振興機構アジア経済研究所図書館に寄贈された(宇戸 2020-2021)。国立国会図書館関西館アジア情報課主催の「アジア情報関係機関懇談会」への参加などを通じ、学外の図書館間関係者と交流していたことは大変有益であった。

## **3. ベトナム語・タイ語目録作成ノウハウの蓄積**

### **(1) 東南アジア諸国の目録の流用**

2020年10月にアジア研究図書館が開館する頃からスペースの問題が改善し、研究員が目録担当職員の協力を得ながら直接東京大学OPAC登録を行うという方法も選択可能になった。

その結果、原則としてローマ字表記であり、翻字・分かち書きの不要なベトナム語資料については、エクセルシートを使って新規の書誌データを作るよりも、ベトナム

国内の図書館のOPACから書誌データをコピー＆ペーストして、新規書誌データを作るほうが効率的であることがわかってきた。具体的には、既存書誌データ、しおり、資料現物、発行国の図書館のOPACの検索結果等を参考に目録担当職員と研究員が相談して書誌データを作るようになった。このような状況の中で、目録担当職員がベトナムの図書館のOPACを検索するための教材やマニュアルの必要性を認識した。

一方タイ語については、原則としてタイ文字で表記されるために、翻字と分かち書きが必要になることから、依然として研究員が書誌データ作成の一部を担う必要があった。しかし、タイ語担当の宇戸の勤務は基本的に週1回であった。そのため、宇戸の不在時に目録担当職員が参照する教材やマニュアルが必要になった。

## (2) 用語集作成の試み

これらの事情により、2015年から書き溜められてきた担当者間の共有メモである書誌データ作成用の用語集をより充実させるとよいのではないかという考えが生まれた。担当者間で検討のすえ、2021年11月の第23回図書館総合展2021\_ONLINE\_plusを機に、PDF版の「ライブラリアンのためのベトナム語・タイ語用語集」をインターネット公開するに至った（澁谷・宇戸・佐藤 2021）。

## 4. おわりに

以上が「東南アジア三文庫」の整理の過程である。

図書館における寄贈資料の整理がいかに大変であるのかという点については、すでに何人かの図書館関係者が報告や問題提起を行っている。研究者が遺し、自治体や公共図書館に寄贈された資料が公共図書館の重荷になりかねないという問題については（大谷 2017）で論じられてきた。また鈴木宏子は、一橋大学附属図書館における寄

贈資料受入について、ほぼ無条件の受入が行われたり受入決定以前から書庫に仮置きされたりしたために混乱が生じていること、「滞貨」（整理中資料）には非図書資料（研究者手稿、ノート、書簡等）も数多くあることを指摘している（鈴木 2019: 7-05-8-7-05-9）。早稲田大学図書館のように、寄贈資料および個人研究費等返還資料の「処理の流れ」を作ることに積極的に取り組み（[早稲田大学図書館] 2000）、図書館報を通じて退職する教員らに対し寄贈受入に関する情報を発信していた館も存在する（[早稲田大学図書館]図書課 2003）。しかし同館も寄贈資料の受入に課題があることを認めている（宇田川 2016: 5）。

資料の寄贈を検討するアジア研究者や寄贈資料の受贈を検討する図書館職員にとって、本報告が何らかの参考になれば幸いである。

## <謝辞>

本報告の草稿に目を通し適切な助言を下された関係者各位に謝意を表したい。

## <注>

1 第二期（2019～2023年度）のミッションの中心は協働型アジア研究の拠点形成に移った。

2 ALA-LC方式の翻字ルールとは米国議会図書館とアメリカ図書館協会が作成した翻字ルールである。このルールは研究者が普段使用する翻字ルールと異なる場合がある。

## <参考文献>

宇田川和男. 2016. 「図書館への寄贈について」『ふみくら：早稲田大学図書館報』90: 4-5.

<http://hdl.handle.net/2065/51643>

宇戸優美子. 2020-2021. 「末廣昭文庫」2022年3月16日アクセス.

<http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/suehiroakirabunko>

大谷卓史. 2017. 「過去からのメディア論 図書館における寄贈本の受難：学術資料としての可能性とその限界」『情報管理』60(4): 279-283.

<https://doi.org/10.1241/johokanri.60.279>

澁谷由紀. 2020-2021. 「桜井由躬雄文庫」2022年3月16日アクセス.

<http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/sakuraiyumioobunko>

———. 2021a. 「古田元夫文庫」 2022年3月16日アクセス.

<http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/furutamotoobunko>

———. 2021b. 「【アジア研究この一冊！】 桜井由躬雄文庫のベトナム伝統演劇関係本について」 2022年3月16日アクセス.

<http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/t-his-book13>

———. 宇戸優美子・佐藤章太編. 2021. 「ライブラリアンのためのベトナム語・タイ語用語集」 2022年3月16日アクセス.

[http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2021/11/SEA\\_2021glossary-\\_asian\\_research\\_library\\_1.pdf?\\_fsi=WyC3oi9T](http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2021/11/SEA_2021glossary-_asian_research_library_1.pdf?_fsi=WyC3oi9T)

末廣昭. 2021. 「社会科学研究所の『アジア図書館』構想」(連載・先達の先見第3回)

『東京大学アジア研究図書館』(東京大学アジア研究図書館ニューズレター) 3: 5-7.

[https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/sites/default/files/UTARLnews\\_03\\_20210401.pdf](https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/sites/default/files/UTARLnews_03_20210401.pdf)

鈴木宏子. 2019. 「一橋大学附属図書館の再生に向けて：ビジョンと課題」『一橋大学附属図書館研究開発室年報』7: 7-05-1-7-05-14.

<https://hdl.handle.net/10086/30135>

古田元夫. 2014. 「東京大学アジア研究図書館計画から(巻頭エッセイ)」『アジア研究ワールド・トレンド』222:1.

<http://doi.org/10.20561/00045427>

[早稲田大学図書館]図書課. 2003. 「退職される先生方へ 図書のご寄贈を受け入れています」『ふみくら：早稲田大学図書館報』70: 3.

<http://hdl.handle.net/2065/47539>

[早稲田大学図書館] 2000. 「寄贈図書・個人研究費等返還図書の処理計画について(図書のリサイクル)」『早稲田大学図書館年報』1999: 18-19.

<http://hdl.handle.net/2065/48456>



## 令和三年度導入データベース紹介

アジア研究図書館は令和三年度に5点のデータベースを導入した。以下、それぞれのデータベースを簡単に紹介する。

なお（１）と（２）は、公益財団法人上廣倫理財団の寄付を得て附属図書館に設置された研究組織であるアジア研究図書館上廣倫理財団寄付研究部門（U-PARL）により導入しえたものである。深く感謝したい。また、以下に記す情報はすべて2022年3月時点のものである点、注意されたい。

### （１）『中華經典古籍庫』第8期

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/contents/database/356>

U-PARLは昨年度、既に導入済みの『中華經典古籍庫』第1～7期に続き、第8期を購入し、学内での利用提供を開始した。『中華經典古籍庫』は、中国で刊行された書籍をテキストデータ化したデータベースである。詳しくは、U-PARLウェブサイト「【DATABASE】中華經典古籍庫」<http://u-parl.lib.u-tokyo.ac.jp/archives/japanese/keitenkosekiko-3-3>などを参照されたい。

第8期も、「經典古籍」の名に違わず、『陶淵明詩箋注』（華東師範大学出版社、2017年9月）、『大明一統志』（巴蜀書社、2017年11月）『尚書注疏校議』（中華書局、2018年4月）、『爾雅正義』（中華書局、2017年12月）など、中国前近代の文・史・哲研究や語学研究に資する漢籍が多数を占めるが、馬建忠『法國海軍職要』（中華書局、2013年4月）、李宗棠『考察日本學校記』（黄山書社、2019年2月）など、近代中国の資料も少なから

ず選ばれている。のみならず、日本人による漢文資料である圓仁『入唐求法巡禮行記校注』（中華書局、2019年10月）、海外の中国研究である巴洛斯著・何高濟譯『十六世紀葡萄牙文學中的中國』（中華書局、2013年10月）なども収録されている。狭義の“古籍”のイメージから本データベースにはあまり縁がないように感じている、近現代中国研究、日本研究などを専門とする学生・大学院生にもぜひのぞいてみていただきたい。収録書籍リストは東方書店ウェブサイト[収録書目]からダウンロードできる（Microsoft Excel形式）：

<https://www.toho-shoten.co.jp/er07/chukakeiten.html>

### （２）Myanmar Book Centre (MBC) Membership Programme

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/contents/database/182>

ミャンマーの輸出入書店によって提供されたミャンマーで最初の学術関係オンラインデータベースである。2022年3月現在、

- Articles from Journal of Burma Research Society (1911-1977)
- ミャンマー伝統写本コレクション（Collection of Myanmar Traditional Manuscripts）
- 独立以後に刊行されたミャンマーの歴史・文化・考古学・文学に関する記事データベース（Articles of Selective works on Myanmar history, culture, archaeology and literature after

independence Database)

- 電子書籍 (Electronic Books)
- デジタル化された新聞記事 (Digitised newspapers)
- ミャンマーの古い絵画の折畳本 (Old Myanmar Illustrated Parabaiks)
- ビルマの雑誌 The Guardian (Burma's National Magazine)
- ビルマ地誌 (Burma Gazetteers)

の各セクションの本文のみが利用できる。

とくに新聞記事については、1929年から2013年までに刊行された、英語およびミャンマー語の合計11タイトルの新聞が利用できる点で利便性が高い。

利用の際には、必ずマニュアルを一読いただきたい：

[https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/sites/default/files/database/manual/MBC\\_manual.pdf](https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/sites/default/files/database/manual/MBC_manual.pdf)

### (3) Index Buddhicus Online

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/contents/database/427>

Brill社が提供する、仏教学に関する包括的な書誌データベースである。定期刊行物やプロシーディング、研究書に収録された論文、記事、章、参考文献、校訂本、デジタルリソースに至るまでの二次資料からデータを採取する。定期刊行物に限っても収録誌は五〇余誌を数える。欧米主要誌は勿論、我が国の『印度學佛教學研究』『佛教史学研究』といった学会誌から、『駒澤大学佛教学部研究紀要』などの紀要刊行物まで、幅広い出版物を押さえる。

インターフェースは直感的で、特段の解説を要しない。基本検索のほか、author、title / heading、keyword、publisher の指定が可能であり、特定の語の除外も可能である。インド諸語の場合、転写文字による入力の有無を問わないようだが（例えばtathagata / tathāgata）、「阿弥陀」「阿彌陀」「amida」で

結果に大きな差が出るなど、注意を要する。

我が国には、主に日本国内で発行された定期刊行物、記念論文集、一般の論文集等の中から書誌情報およびキーワードを収録した、「インド学仏教学論文データベース (INBUDS)」<https://www.inbuds.net/jpn/>という非常に優れたデータベースが存在する。INBUDS を併用することで、より網羅的な書誌情報を構築できるだろう。

### (4) Russian Military Intelligence on Asia Online: Secret Prints, 1883-1914

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/contents/database/428>

Brill社が提供する、アジアにおけるロシアの軍事諜報活動に関するデータベースである。元の資料は、ロシア革命前の1883年から1914年にかけてロシア帝国参謀本部から発行された87巻（補遺9冊付）の機密資料であり、軍部の上級司令官たちに、ロシアや西洋の探検家、将校、研究者が書いたアジア各地に関する知識を普及させる目的で編纂されたものである。発行部数が限られ、ロシア国外からアクセスできる完全なコレクションは存在しない貴重な資料である。Сборник географических, топографических и статистических материалов по Азии. - СПб., 1883-1914 (アジア関連地理学的地形学的資料選集) ロシア公共図書館所蔵

中央アジア各地を探検したロシア将校ニコライ・プルジェヴァリスキー、トルキスタン総督アレクセイ・クロパトキン、フィンランドの軍人グスタフ・マンネルヘイムらが執筆した旅行記や調査報告のほか、ロシアのインド侵攻計画、ヘラート包囲、ヨーロッパ各国の対清遠征など、19世紀のアジアに関する未活用の情報が提供されている。

トップページに全巻の目次が掲載されており、それを開くと各記事ごとのリンクが貼られているというシンプルな作りとなっ

ている。資料がロシア語であるにも関わらず英語でしか検索できない点は注意を要する。

**(5) Russian Military Intelligence on Asia  
Online: Archive Series, 1651-1917**

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/contents/database/429>

Brill社が提供する、ロシア国立軍事歴史文書館所蔵（RGVIA: Российский государственный военно-исторический архив, Fonds 444-451）の1936ファイル分の文書のデータベース。

極東危機（中国、日本、朝鮮）、東方問題（トルコ、パレスチナ、アラビアとシリア）、グレートゲーム（ペルシア、アフガニスタン）の三部から構成される。ロシア帝国によるアジア各地の軍事、地形、政治、経済、民族など多様な情報が収録されている。ファイル数が最も多いのは、トルコ（917ファイル）であり、黒海やクリミアをめぐる露土戦争のさなかに収集されたオスマン帝国各地の詳細な地理情報や軍事情報を含む。中国（384ファイル）のファイルでは、イリ条約、遼東半島の租借、満洲をめぐる露清密約などの諸問題が扱われている。ペルシア（364ファイル）のファイルには、コーカサスに関するものが多く、地理情報のほか、アルメニア人の動向など民族問題に関する情報も多い。

検索欄では、キーワード等で検索できるが、文書がロシア語であっても英語でしか検索できない点は注意を要する。その代わりにデータベースのトップページからリンクされているBrill社の詳細ページで各国別の文書ファイルのタイトル情報が入手できる（ただしこれも英訳）。

<https://brill.com/view/db/miao>

# アジア研究図書館利用案内

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/asia/user-guide>

場 所	総合図書館4階
開館日／閉館日	総合図書館の開館日・閉館日に準じます。
開館日	以下閉館日を除くすべての日
閉館日	年末年始(12月28日～1月3日) 定例休館日(おおむね毎月第4木曜日) 夏季の一斉休業日(2日間) 試験等大学行事のための閉館日 その他臨時閉館日

## 開館時間

曜日等	通常期	8月・3月
月～金曜日	8:30～22:30	8:30～21:00
土・日・祝日	9:00～19:00	9:00～17:00

学外の方もご利用いただけます。詳しくはホームページをご覧ください。

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja/library/general/user-guide/outside/gakugai>

## 次号の予定

第8号は令和四年七月一日に発行予定です。

ニューズレターへの情報提供、投稿や、記事へのご要望があれば、東京大学アジア研究図書館([asialib@lib.u-tokyo.ac.jp](mailto:asialib@lib.u-tokyo.ac.jp))までお知らせ下さい。

## 編集後記

第7号をお届けします。

今回は令和三年度にアジア研究図書館が行なった活動報告がほとんどの紙面を占めました。寄贈資料の受入とその整理は、アジア研究図書館が行なう中核的事業のひとつです。今回はユネスコ・アジア文化センター(ACCU)寄贈識字教育資料の整理に携わった学生たちからご寄稿いただき、さらに澁谷、宇戸両先生からは東南アジア関係寄贈資料の整理に関する貴重な報告をご寄稿いただきました。アジア諸言語の資料整理に対する本館の取り組みの一端を知るよすがともなれば幸いです。